

ソーシャルワークの多様な知をどう捉えるか —国際的な視点から—

東 田 全 央*

Re-examining diverse social work knowledge: An international perspective

Masateru Higashida

要 旨

本講義は、ソーシャルワークの多様な知をめぐる議論について国際的な視点から整理し、学生向けに紹介することを目的とする。これまでに発刊・掲載した拙著や研究活動の知見、とくに国際ソーシャルワークの概念構築に関する洞察を交えながら、基本的な論点のエッセンスを示す。はじめに、自国内における社会福祉とその実践にかかる状況のみならず、国際的な視点を意識する重要性について指摘する。つぎに、基礎概念として、ソーシャルワークにおける（新）植民地主義と脱植民地化、普遍主義（ユニバーサリズム）と文化相対主義の間の緊張などについて整理する。それらの潮流を概観しながら、ソーシャルワークにおける知に着目し、土着知（インディジナスな知）、外来知、越境する知などの多様な側面があることを述べる。最後に、国際的視点、あるいは国際ソーシャルワークの視点から、すべての人のウェルビーイングを意識することとともに、互恵的な対話によって多様な知を学び合い、共創することの重要性について考える。

【キーワード：国際ソーシャルワーク、インディジナスな知、地域・民族固有の知、越境】

1. はじめに

非英語圏で社会福祉やソーシャルワークを学んでいる、あるいは学んだ方々にとって、ソーシャルワークの理論や知識としてどのようなものが思い浮かぶだろうか。自国内の社会福祉法制度は別として、外来語（とくに英語）由来の用語で示される理論や知識が多い印象を持つことはないだろうか。ソーシャルワークと多様性について考える際、それらは、疑う余地のない、あたりまえのこととして捉えるしかないのだろうか¹⁾。

他方、自国内の社会福祉やソーシャルワークにおいて多様性の議論が活発化している。本来、多文化や共生は、多様な背景や文脈、およびその複合性が考慮されるものであるが（河森他, 2016；白石・戸田, 2022）、社会福祉分野においては、たとえば、異文化間のソーシャルワークや多文化ソーシャルワーク（石河, 2012, 2020）、その他類似する概念や用語とともに議論されることがある。その特定の文脈においては、海外ルーツのあ

る人々、在留外国人、移民・難民の増加と、それに付随する諸課題等（地域社会での摩擦、社会的排除、偏見や差別を含む）により、現実世界において複雑化し多様化する事象とそれらに関する実践のあり方が切実なテーマとなってきた。

しかし、ソーシャルワークと多様性について考える場合、果たして、特定の国・地域あるいは自国の文脈や規範からのみ検討するだけで十分なのだろうか。そのソーシャルワークが、ある特定の価値と視点にのみに彩られているとしたら、多様性の議論はどのような結論に至るであろうか。

これらの根本的な問いについて考える一つの手がかりとして、本講義ではソーシャルワークの知を議論するための国際的な視点を紹介する。はじめに、世界的な背景とソーシャルワークとの接点を示す。そのうえで、国際ソーシャルワークの基礎的な視点について触れる。それらをもとに、ソーシャルワークと多様な知について再検討を試みるとともに、多様なソーシャルワークを探究する意義について考える。一言で言えば、本講義では、開かれたソーシャルワークとその知について

*島根大学人間科学部

考えたい（東田, 2026）。

2. 背景

さて、グローバル化により、人、モノ、金、情報、その他が、いともたやすく国境を越えて行き来しているように思われる。国境を越える流動性、物流、情報通信技術、人工知能（AI）によって、多くの人々が恩恵を受けている場合がある。そこにある影響のもたらし合い、あるいは相互作用は必ずしも均等なものではないが、相互依存性のある世界を象徴する（Healy & Thomas, 2021）。その一方で、世界規模の社会課題や、グローバル化に関連する様々な社会福祉的課題がローカルにも顕在化している（Cox & Pawar, 2013）。戦争や紛争、労働搾取や劣悪な労働環境、経済格差の拡大、環境破壊と気候変動、開発の名のもとでの強制移住や地域文化・生活様式への影響、先住民やマイノリティへの抑圧、難民問題など、例をあげればきりが無い。そして、貧困や不平等、健康課題、教育の不十分さなど、世界の各国・地域における人びとが直面する困難さは、それらの世界規模の事象や構造と何らかの形で関連しあっていることも推察される（東田, 2023, 2026）。

それらの背景のもと、ソーシャルワークにおける多様性への意識の高まりは重要な潮流である。実際、2014年に国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）と国際ソーシャルワーク学校連盟（IASSW）により採択された「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」（以下、グローバル定義）においても、人権や社会正義とともに、「多様性の尊重」がソーシャルワークの諸原理・原則の一つとして掲げられた（IFSW & IASSW, 2014）。加えて、同定義は、「『危害を加えないこと』と『多様性の尊重』は、状況によっては、対立し、競合する価値観となることがある」として、マイノリティの権利を例に、「文化の名において侵害される場合」にも触れている（日本ソーシャルワーカー連盟（JFSW）, n.d.）。グローバル定義の策定過程への疑義（たとえば、それは多様性のある議論であったか）があり、再考も求められるが（秋元, 2015）、ソーシャルワークにおいて少なくとも多様性の重視が表明されてきたことは明らかである。

そのような世界の状況下で、ソーシャルワークと多様性を考えるときに、国内（自国）からの視点だけでは議論が限定的にならざるを得ないのではないか、という懸念がある（秋元, 2025；Higashida et al., 2024）。それらを乗り越えるための手がかりの一つとして、本講義では国際的視点からソーシャルワークの多様な知について考え

る。そして、国際的な視点が重要かつ有用であることを示す。それは、一般のソーシャルワーク教育で学ぶ（また養成教科書に書いてある）ような、主流のソーシャルワークを否定するわけではなく、むしろ、ソーシャルワークの多様な知と可能性を広げるものである（Higashida, 2024b）。

3. 基礎概念

つぎに、国際的な視点から、ソーシャルワークと多様な知について考える前提として、基本的な概念について述べる。ソーシャルワークにおける（新）植民地主義や一方向的な知の移転等に対する批判と、脱植民地主義やインディジナスな知等があげられ、それらは学際的な議論や運動からも影響を受けてきた。

ソーシャルワークにおける植民地主義と帝国主義、一方向的な知の移転等に対する批判は、「グローバル定義」（IFSW & IASSW, 2014）においても簡潔にまとめられている。

この定義は、ソーシャルワークは特定の実践環境や西洋の諸理論だけでなく、先住民を含めた地域・民族固有の知にも拠っていることを認識している。植民地主義の結果、西洋の理論や知識のみが評価され、地域・民族固有の知は、西洋の理論や知識によって過小評価され、軽視され、支配された。この定義は、世界のどの地域・国・区域の先住民たちも、その独自の価値観および知を作り出し、それらを伝達する様式によって、科学に対して計り知れない貢献をしてきたことを認めるとともに、そうすることによって西洋の支配の過程を止め、反転させようとする。ソーシャルワークは、世界中の先住民たちの声に耳を傾け学ぶことによって、西洋の歴史的な科学的植民地主義と覇権を是正しようとする。こうして、ソーシャルワークの知は、先住民の人々と共同で作られ、ローカルにも国際的にも、より適切に実践されることになるだろう。（JFSW, n.d.）

ソーシャルワークにおける（新）植民地主義とは、旧植民地の独立後も旧宗主国が政治的・経済的に影響力を持ち続けることや、欧米にルーツがあるソーシャルワークとその専門職化における知や技術、システム等がその他の地域に一方向的に導入されてきた構造や政治的力学を含意することが多い。その歴史的過程においては、欧州や北米をはじめとする地域や国々のソーシャルワーク関係者と、それらの人びとの関与を含む国際機関・団体等が、規範となる言説を生成し、旧植

民地諸国やその他の国・地域においてコンサルティングや技術の移転等も行ってきたといわれる (Midgley, 1981)。また、国際開発の潮流も受けながら、先進国や国際機関の組織やソーシャルワーク関係者らが開発途上国に渡航し、ソーシャルワークの導入や改善を含む国際協力も推進された。その背景としては、経済的および社会的な優位性あるいは特権性を持つ北半球 (グローバルノース) に遍在する先進国と、それらが不利な状況におかれてきた南半球 (グローバルサウス) に遍在する開発途上国という構造が維持されてきたとされる (Higashida, 2024c)。

そのような欧州や北米にルーツがあるソーシャルワーク (あるいは、西洋生まれ専門職ソーシャルワーク: 秋元, 2018) の理論、技術、価値と倫理等の一方向の移転等に対して批判的な議論が巻き起こった。とくに1980年代初頭に、ジェームス・ミッドグレイ (Midgley, 1981) が「専門職帝国主義」 (Professional imperialism) という言葉を書籍のタイトルに象徴的に用いながら、論述したことが有名である。端的に言えば、欧米のソーシャルワークの理論や技術は、その他の地域には必ずしも適さないのではないか、といった議論が巻き起こってきた。そして、現代のソーシャルワークにおいて、多様な地域的・土着的文化的視点を周辺化させ、その代わりに特定の社会文化に根ざした価値の優越性を主張し、それを標準として一方的に押し付ける指向やその試みなどを、批判対象として**覇権主義**や**帝国主義**と呼ぶことも多い。このように、ソーシャルワークにおける (新) 植民地主義の歴史、構造、影響等に対する批判的な分析・考察に力点を置くポストコロニアル・ソーシャルワーク (Kleibl, et al., 2019) や、それを乗り越えるためのソーシャルワークの**脱植民地化** (decolonisation) (Gray et al., 2016) 等が提起されてきた。

ソーシャルワークにおいて、これらの概念は、ときに、**ユニバーサリズム**あるいは**普遍主義** (universalism) 等との微妙な緊張関係とともに議論されることもある (Beecher et al., 2010; Gray, 2005)。ソーシャルワークにおける普遍主義とは、異なる文脈においても、共通のアイデンティティや価値を見出す立場を指すことが多い。とくに、国際的なソーシャルワークにおいては、国境を越えて何らかの共通する視点を共有することが想定されるため、関係者間で普遍的な価値などについてコンセンサスを取ることは重要な側面になりうる (Beecher et al., 2010)。たとえば、グローバル定義に加え、ソーシャルワークにおける**グローバル・アジェンダ**などの取り組みは、非西洋の概念 (例として、アフリカの哲学的思想で地域社会における相互依存や尊厳等を含意

する「**ウブントウ**」 (Ubuntu) や、南米において自然環境と調和した尊厳のある生活等を意味する「**ブエン・ヴィヴィル**」 (Buen Vivir)) を使用する場合もあるが、一般的には**ユニバーサリズム**を指向する象徴的なものかもしれない (Levy et al., 2022)。他方、ソーシャルワークの**普遍主義**という名の下で、ときに (新) 植民地主義とあいまって、旧態依然たる構造的な問題が温存される場合もある。

ソーシャルワークにおいて、**ユニバーサリズム**の対義語に当たるものとして、**相対主義**あるいは**文化相対主義** (cultural relativism) などがある。それは、ソーシャルワークに関連する価値や規範が、文化や共同体、歴史的経過によって異なるとする立場である (Nuttman-Shwartz, 2017)。

しかしながら、そもそも、**ユニバーサリズム**と**相対主義**が二項対立的に議論されることについても論争がある (Gray, 2005)。さらに、ソーシャルワークの**脱植民地化**は多くの地や文脈によっては極めて重要であるが、すべての国・地域が植民地化を必ずしも経たわけでもなく、すべての文脈において**脱植民地化**が必須であるかについては疑問が残る。それらの点も踏まえつつ、ソーシャルワークの「知」に着目しながら考えてみたい。

4. 土着知・外来知・越境する知

様々な立場からの主張や声を交えた論争が続く中で、重要な論点の一つは、ソーシャルワークにおける**知**あるいは**知識** (knowledge) をどのように捉えるか、についてである。教科書的には、ソーシャルワークにおける**知**とは、「**理念、原理、原則に基づいて行われる実践とその実践を理論的に裏付ける視点と知識 (理論)**」とされる (日本ソーシャルワーク教育学校連盟, 2023: 3 強調は本文)。さらに、**グローバル定義**では、「『**科学**』を『**知**』というそのもっとも基本的な意味で理解したい」 (JFSW, n.d.) と述べるとともに、学際的な知や、利用者および当事者との**共創知**についても触れている。知や知識とは、哲学的な論争にもみられるように、認識論を背景として様々な議論がなされているが (ダンカン・プリチャード, 2022)、本講義では、先述のソーシャルワークをとりまく国際的な前提を読み解くものとして、**インディジナスな知、外来知**および**越境する知**に焦点を当てる。とくに、先行研究や私自身のこれまでの知見に触れながら述べる²⁾。

現代のソーシャルワークにおいて注目されているのが**インディジナスな知**、**先住民の知**、あるいは**グローバル定義の和文定訳では地域・民族固有の知** (indigenous knowledges) である³⁾。それは、地域社会や文化に根ざした知とその生成の過程を

強調するとともに、ソーシャルワークにおける西洋ルーツの主流な知としばしば対比される (Levy et al., 2022)。グローバル定義の和訳注には、それについて、「世界各地に根ざし、人々が集団レベルで長期間受け継いできた知を指している。中でも、(中略) いわゆる『先住民』の知が特に重視されている」(JFSW 訳) と記されている。インディジナスな知は、自然環境についての知恵や技術、永年にわたり受け継がれてきた物語を含め、極めて広範であろうが (三島, 2016)、文化と同様に、それ自体を固定的な実体とみなすというよりは、変化していく過程の中で捉える視点が主張されることも多い (Gray, 2005)。

他方で、北米や欧州で語られるインディジナスな知と、いわゆるグローバルサウスと言われる国々で語られるそれとの間には、(あるいは国や地域に関わらず、論者によって) 意味や用語の差異がみられるため注意が必要である。多くの場合、ソーシャルワークの脱植民地化の潮流と相まって、それぞれの地域社会の文脈にあった、あるいは社会文化に適したソーシャルワーク (culturally relevant social work) の実践や探究が世界各地で試みられている (Gray & Coates, 2010)。しかし、必ずしも脱植民地主義の文脈からではなく語られる例もみられる (Higashida, 2024a)。

このように使用する文脈や人によってインディジナスの意味が異なることに加え、少し複雑なのが、インディジナスな知に関連する概念として、**土着化 (indigenisation)** がある。これは用いる論者によって意味や含意が異なる場合、ときに正反対の場合もありうる (Gray & Coates, 2010; 秋元, 2018)。その一つは、ソーシャルワークをその土地に合わせて主体的に (再) 構築または改良し、自ら正当性を与えるという意味での土着化である。もう一つは、西洋ルーツのソーシャルワークがそれ以外の土地に (押し付けや植民地主義的側面を伴いながら) 導入しやすいように変更される、ということへの批判的な議論の対象としての土着化がある。別の言い方をすれば、ソーシャルワークにおいて土着化を肯定的にみなすか、否定的または批判的に捉えるか、ということにも行き着く。

つぎに、**外来知**は、ある地域や枠組みの境界 (たとえば国境) を越えて入ってきた知識や知見等の総体とその過程、として広く解釈することができ、ときに在来知とも比較される (佐藤, 2010)。さらに、特定の知の方向性を問わず、境界を越える (あるいは超える) 知を指す場合には**越境する知**を用いることができる。「知の越境とは、学問分野の越境であるだけでなく、(中略) 国と国との境界の越境であり、階級、人種、

性、世代の境界の越境であり、(中略) 言語と権力が作動するあらゆる境界の越境を意味」(栗原他, 2001:i) すると考えることもできる (東田, 2022, 2023)。

ただし、グローバリゼーションが世界の隅々にまで何らかの影響を与えているようにさえ思われる現代および将来において、ソーシャルワークの純粋な土着知や外来知というように分けることができるのか、あるいはそれらは社会的に (とくに学術的に) 構築されたものに過ぎないのか、と問い続けることは重要である (東田, 2022, 2023)。

そのような多元的な知について特定の文脈や内容を意識した場合、図1に示すように、ソーシャルワークの多様な知および言説の位置づけを解釈や議論することができるのではないかと。これは、ソーシャルワークの知の類型化のために提示するわけではなく、関連する理論や知がどの領域・層に関わっているかを読み解くツールの一つとして活用していただきたい。実際には、それぞれの層がグラデーションあるいは連続体 (スペクトラム) にあろう (東田, 2023)。とくに、ソーシャルワークや社会福祉を学んでいる、または学んだ方々にとって、自身が認識するソーシャルワークの知識や理論がどのあたりに位置づくかについて、俯瞰的な議論を試みてほしい。

5. 国際的視点に基づく対話による多様な知の再検討

ここまで、ソーシャルワークに関連する歴史や世界規模の構造を読み解くための基礎的な視点を概観したのち、多様な知の諸側面に着目してきた。しかし、**多元的な世界**あるいは**プルーリバー** (Escobar, 2011) におけるソーシャルワークの議論を重ねていったとしても、原理的な困難さにも直面しうる。その困難さは、ソーシャルワークに深くかかわる宗教や文化、価値体系と密接に

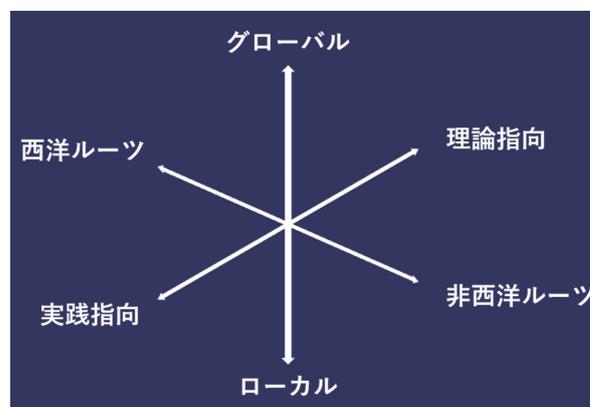


図1. ソーシャルワークの多様な知の位置づけについて議論するための三次元ツール

出典：東田 (2023 : p. 31)

関連している可能性がある。たとえば、西洋生まれの専門職ソーシャルワーク（秋元, 2018）について、欧米の利益、ユダヤ教・キリスト教に関連する価値や規範、個人主義的な視座などが埋め込まれた言説とその押し付けに対して批判的に議論されることが多い（Gray, 2016; Gray & Coates, 2010）。しかし、たとえば他宗教に基づくソーシャルワークを代替的に提起したとして、あるいはそれらを寄せ集めたとして、果たして、すべてのソーシャルワークにおける多様な知を包含するような議論に行き着くのだろうか（東田, 2026）。ソーシャルワークの知や実践において文化や宗教との関連を意識することは極めて重要であることは疑いないが、ある特定の枠に依存するソーシャルワークの議論のみに終始しては先を見越すことはできないと考える。そのような困難さを乗り越える手がかりとして、本講義では、近年新しく提案された国際ソーシャルワークの概念を多様な対話の場に用いる手法について要約して提示する⁴⁾。

「国際ソーシャルワーク—新たな概念構築」（Higashida et al., 2024；東田他, 2025）が発刊された。その当初の企画立案者であり主要執筆者の秋元は「西洋生まれのソーシャルワークの国際ソーシャルワーク」の位置づけを歴史的に明確にした上で、非西洋の文脈を事例⁵⁾に用いながら、代替的な国際ソーシャルワークがありうることを示した。そして、国内や国別の国際ソーシャルワークと対比しながら、理念型の国際ソーシャルワークの新たな概念化を試みた（東田, 2026）。その新たな国際ソーシャルワークについて、次の定義を示した。

『国際ソーシャルワーク』は一定の理念に裏付けられた国境を超えたあるいは国境に関わるソーシャルワークである。対象は世界中のすべての国および地域のすべての人々であり、目的はその人々のウェルビーイングを向上することである。もたれなければいけない「ものの見方」は自国を含め主権国家の外からの目、複眼、あるいは二つ以上または共通の「もの差し」をもって見ることである。『国際ソーシャルワーク』はいかなる特定の国または地域、国民、国籍にいかなる重要性、優越性または劣等性を与えない。『国際ソーシャルワーク』の対語は「国内」ソーシャルワークである。『国際ソーシャルワーク』はすべての土着（インディジナス）のソーシャルワークと共通的に併存可能でなければならない。（秋元, 2025：p. 118）〔オリジナルの注釈は除く〕

秋元の記述（第3章）を手掛かりに、対話における道具（ツール）として、理念型の国際ソーシャルワークの新概念をトーチ（松明あるいは聖火）、また省察的な対話の作用を鏡と見立てたメタファーを用いてみるとどうなるか（東田, 2026）。重要なのは、いわゆる国際協力あるいは「外国人」支援におけるソーシャルワークだけではなく、意識として国境を超える限りにおいて、あらゆるソーシャルワークとその知が対話の対象となりうることである—自国から考え始めるならば、「国内」ソーシャルワークとなるかもしれない。下記に示す手法は、あたりまえとさえ思われるソーシャルワークの実践や知を問い直してみる機会をもたらさう。

第一の手法は、トーチたる理念型「国際ソーシャルワーク」が照らす下で、人びとが鏡に映して語り合うというようなイメージである。それは、上記の定義に示された理念型、あるいは理想ともいえる国際ソーシャルワーク概念（トーチ）を手掛かりに、自己や集団の実践と対比する（鏡に映す）対話である。このねらいは、自己や集団がかかわりのあるソーシャルワークについての経験をもとに、それらに含まれる知を言語化し、浮かび上がらせ、対比し、そこから相互に学び合うことにある（東田, 2026）。

第二の手法は、トーチを語るようなイメージである。このねらいは、ソーシャルワークや国際ソーシャルワークの概念的な再考を促すような、革新的な対話を促進することにある。あたかも実体のようにみなす理念型の国際ソーシャルワーク概念（トーチ）と、現実世界における（国際）ソーシャルワークの知との関係性を対比しながら（鏡の機能）、おそらく概念的な議論が深められる（東田, 2026）。

これらにより、国際ソーシャルワークの文献等において議論されてきたような、様々な境界を越えて、対等な立場で、互恵的で開かれた対話に至ることが期待される（Dominelli, 2020; Higashida, 2024b; Higashida et al., 2025）。

6. おわりに

本講義では、国際的な視点を強調しながら、ソーシャルワークにおける多様な知について批判的な議論を行いつつ、対話を促進する探索的なツールの提示を行った。ソーシャルワークの多様な知を考えるとすることは、翻って、人びととソーシャルワークの多様性を考える視点ももたらすであろう。矮小化されたソーシャルワークの知や視点を誰か、どこかに押し付けるとするならば、植民地主義的实践を再生産することにもなりかねない。その一方で、国際ソーシャルワークに多く

みられがちな抽象的な議論を超えて、人と人との関係性の中での真の対話を通じて、ソーシャルワークと多様性の議論が深められていくことが期待される。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP24K16556, JP25K05577 の助成を受けたものです。また、本稿は、日本ソーシャルワーク学会「多様性と文化的コンピテンスにもとづくソーシャルワークのあり方に関する研究会」への参加をきっかけとして、個人として探究した知見を教育に還元するためにまとめたものです。

註

- 1) 日本においては、おもにカタカナで示される専門用語が想定される。本講義ではこの論点について議論するものではないが、特定の国におけるソーシャルワークの導入の歴史を読み解くことは興味深い。一例として、井上 (2020) を参照のこと。
- 2) 本節のうち、外来知と越境する知についての記述は、拙著 (東田, 2022, 2023) の記述を要約して抜粋したのち、変更を加えて再利用したものである。
- 3) 英語の Indigenous peoples は先住民を指す。
- 4) 拙著論稿から主要な議論の一部を要約・簡略化したのち、本書に合わせて改変して再利用した (東田, 2026)。詳細の議論については同拙著を参照していただきたい。
- 5) 国際ソーシャルワークの新概念の検討にあたって、事例として、日本の国際社会福祉の議論のほかに、仏教ソーシャルワークが取り上げられた (東田他, 2025)。国際ソーシャルワークにかかる主流の議論の問い直しを提起したことには多大な意義があったが、その枠組み自体についても再検討する必要がある (東田, 2026)。繰り返しになるが、仮に、特定の国の文脈や宗教等に基づく国際ソーシャルワークを提起するとすると、それは西洋生まれ専門職ソーシャルワークの国際ソーシャルワークがなしてきた道を歩みうるものではなからうか (東田, 2026)。その寄せ集めが理想型の国際ソーシャルワークになるという確証はない。

引用文献

秋元樹. (2015). 「あなたは世界定義を受け入れられるか? — 『専門職ソーシャルワークでないソーシャルワーク』を例に」『ソーシャルワーク研究』41(3), 187-198.

秋元樹. (2018). 「ソーシャルワークの第3ステージ—ソーシャルワークを世界のものに」郷堀ヨゼフ他編『西洋生まれ専門職ソーシャルワークから仏教ソ

—シャルワークへ』学文社. (pp.5-8)

秋元樹. (2025). 「新たな国際ソーシャルワークの建設 (構築)」東田全央・秋元樹・松尾加奈 (編)『国際ソーシャルワーカー—新たな概念構築』旬報社. (pp. 79-127)

石河久美子. (2012). 『多文化ソーシャルワークの理論と実践—外国人支援者に求められるスキルと役割』明石書店.

石河久美子. (2020). 「変容する外国人の現状と多文化ソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』46(1), 5-16.

井上祥明. (2020). 「GHQ によるソーシャルワークの導入」『熊本大学社会文化研究』18, 15-30.

河森正人・栗本英世・志水宏吉. (2016). 「共生学は何をめざすか」河森正人・栗本英世・志水宏吉 (編)『共生学が創る世界』大阪大学出版会. (pp. 1-15)

栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉 (編). (2001). 『越境する知知1—身体:よみがえる』東京大学出版会.

佐藤賢一. (2010). 「在来知と外来知の相剋—近世日本科学史を例として」『Studia Classica』1, 261-288.

白石雅紀・戸田有一. (2022). 「日本におけるマイノリティ集団間の相剋とその超克の方向性—マイノリティ共感などによる多様性の織りなし—」『未来の保育と教育—東京未来大学保育・教職センター紀要』9, 35-49.

ダンカン・ブリチャード (笠木雅史・訳). (2022). 『知識とは何だろうか—認識論入門』勁草書房.

日本ソーシャルワーク教育学校連盟 (編). (2023). 『6 ソーシャルワークの理論と方法 [精神専門]』中央法規出版.

日本ソーシャルワーカー連盟 (JFSW). (nd). 「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」https://jfsw.org/definition/global_definition/

東田全央. (2022). 「ソーシャルワーク実践における地域・民族固有の知、外来知、越境する知—スリランカと日本の実践家を対象とした質的研究結果の再解釈」『アジア国際社会福祉研究所 2021 年度年報』6, 1-13.

東田全央. (2023). 『国際開発ソーシャルワーク入門 改訂版』大阪公立大学出版会.

東田全央・秋元樹・松尾加奈 (編). (2025). 『国際ソーシャルワーカー—新たな概念構築』旬報社.

東田全央. (2026). 「国際ソーシャルワーク新概念を活用する手法の開発」『島根大学社会福祉論集』10 (印刷中)

三島亜紀子. (2016). 「ソーシャルワークのグローバル定義にみる知の変容—『地域・民族固有の知 (indigenous knowledge)』とはなにか?』『社会福祉学』57(1), 113-124.

Beecher, B., Reeves, J., Eggertsen, L., & Furuto, S. (2010). International students' views about transferability in social work education and practice. *International Social Work*, 53(2), 203-216.

Cox, D., & Pawar, M. S. (2013). *International social*

- work: Issues, strategies, and programs. Sage.
- Dominelli, L. (2020). Personal reflections on 30 years of social work development in China. *China Journal of Social Work*, 13(1), 102-109.
- Escobar, A. (2011). *Encountering development: The making and unmaking of the Third World*. Princeton University Press.
- Gray, M. (2005). Dilemmas of international social work: Paradoxical processes in indigenisation, universalism and imperialism. *International Journal of Social Welfare*, 14(3), 231-238.
- Gray, M. (2016). "Think globally and locally, act globally and locally": A new agenda for international social work education. In I. Taylor, M. Bogo, M. Lefevre, & B. Teater (Eds.), *Routledge international handbook of social work education* (pp. 3-13). Routledge.
- Gray, M., & Coates, J. (2010). From 'indigenization' to cultural relevance. In M. Gray, J. Coates, & M. Yellow Bird (Eds.), *Indigenous social work around the world: Towards culturally relevant education and practice* (pp. 13-30). Routledge.
- Gray, M., Coates, J., Bird, M. Y., & Hetherington, T. (Eds.). (2016). *Decolonizing social work*. Routledge.
- Healy, L. M., & Thomas, R. L. (2021). *International social work: Professional action in an interdependent world* (3rd ed.). Oxford University Press.
- Higashida, M. (2024a). Process of constructing alternative social work discourses in Asia: A case study of Buddhist social work as social representations. *Asian Social Work and Policy Review*, 18(1).
- Higashida, M. (2024b). Re-examining international social work theory: "Where do we come from? What are we? Where are we going?". *Discover Global Society*, 2(1), 31.
- Higashida, M. (2024c). Asymmetrical relationships in international developmental social work practices: A call for the co-creation of knowledge. In Baikady, R., Przeperski, J., Sajid, S. M., & Islam, M. R. (Eds.). *The Oxford Handbook of Power, Politics, and Social Work* (pp. 699-720). Oxford University Press.
- Higashida, M., Akimoto, T., & Matsuo, K. (2024). *International social work of all people in the whole world: a new construction* (2nd ed). Tokyo: Junposha.
- Higashida, M., Poonpoksinsin, W., Attanayake, S., & Herath, C. (2025). Attitudes towards international exchange among social workers in the Asian context: An online survey. *International Social Work*, 68(6), 1014-1031.
- IFSW, & IASSW. (2014). Global definition of the social work profession. <https://www.ifsw.org/what-is-social-work/global-definition-of-social-work/>
- Kleibl, T., Lutz, R., Noyoo, N., Bunk, B., Dittmann, A., & Seepamore, B. (Eds.). (2019). *The Routledge handbook of postcolonial social work*. Routledge.
- Levy, S., Okoye, U. O., & Ingram, R. (2022). Making the 'local' visible in social work education: Insights from Nigeria and Scotland on (Re) balancing and contextualising indigenous and international knowledge. *British Journal of Social Work*, 52(7), 4299-4317.
- Midgley, J. (1981). *Professional imperialism: Social work in the third world*. Heinemann.
- Nuttman-Shwartz, O. (2017). Rethinking professional identity in a globalized world. *Clinical Social Work Journal*, 45(1), 1-9.